

財団だより

多摩川

2001. 12 第92号

山女魚笊
青梅市郷土博物館蔵

多摩川二子橋下のワイルドフラワーガーデン (2001年10月)

多摩川現風景

(48) ワイルドフラワー

ここ二子橋下流の河川敷を含む18ヶ所約5万㎡に四季折々の花を楽しませてくれる花壇がある。

川崎市が管理し、一部は市民ボランティアが丹精こめて手入れをしている。

一方、多摩川固有の植物以外を移植することは生態系を乱すと反対する学者もいる。

多摩川河川敷の植生はセイトカアワダチソウ、オオブタクサ等帰化植物が繁茂し、多摩川固有の植物を見つけることは困難な状況でもある。

そんな折、カワラノギク、タコノアシ等を保護育成している市民グループもいる。また行政施策としてこの3月に策定された国土交通省の「多摩川水系河川整備計画」にはこれら希少種を保護するため生態系保持区域を設け人の立ち入りを制限する措置を講ずることになった。

また、行政と研究者で構成する「河川生態学学

術研究会」では福生市地先永田地区の河川敷でニセアカシア林の一部を根こそぎ伐採し、多摩川固有の埋土種子の発芽・育成の実験を行っている。

・関連する財団の研究助成

< 学術研究 >

カワラノギクの個体群と生育環境の復元についての研究

1998年 井上 健 信州大学 (NO.190)

多摩川の絶滅危惧植物の回復を目指した復元生態学的手法の開発

2001年 小堀洋美 武蔵工業大学 (印刷中)

多摩川河川敷におけるタコノアシの現況、生育特性、保全対策について

2001年 瀬戸口浩彰 京都大学 (研究中)

< 一般研究 >

カワラノギクの保護・育成のための実践的調査研究

2001年 山田半三郎 はむら自然友の会 (研究中)

多摩川散歩

「100年前に降った雨」について

「武蔵野から編集室」代表 野口由紀子

東京の西にひろがる扇状の大地が武蔵野台地です。この地形を断面図でみるとここが地下水の涵養域となっていることがよくわかります。その象徴となっているのが国分寺崖線と野川です。

古多摩川の名残り川は、湧水を集め流れる、野中に育つ雨のレスポンスといえそうです。

『100年前に降った雨』では、崖線の南斜面に、水神を氏神と祭る「貫井」という小さな村をビューポイントに、いま湧く水の記憶を100年前に降った雨にまで想像をめぐらせ、雨の姿を語りかける身近な自然現象を記録しました。

いまから100年前、明治の終わり。貫井は人の数よりも獣たちの数の方が多し里だったそうです。その頃、崖下のはげは、水田がたっぷり水を保っていました。地図に記録された風土をたどり、はげの地形を読み解きながら雨を追って歩くと地

球が呼吸しているのが体感できます。

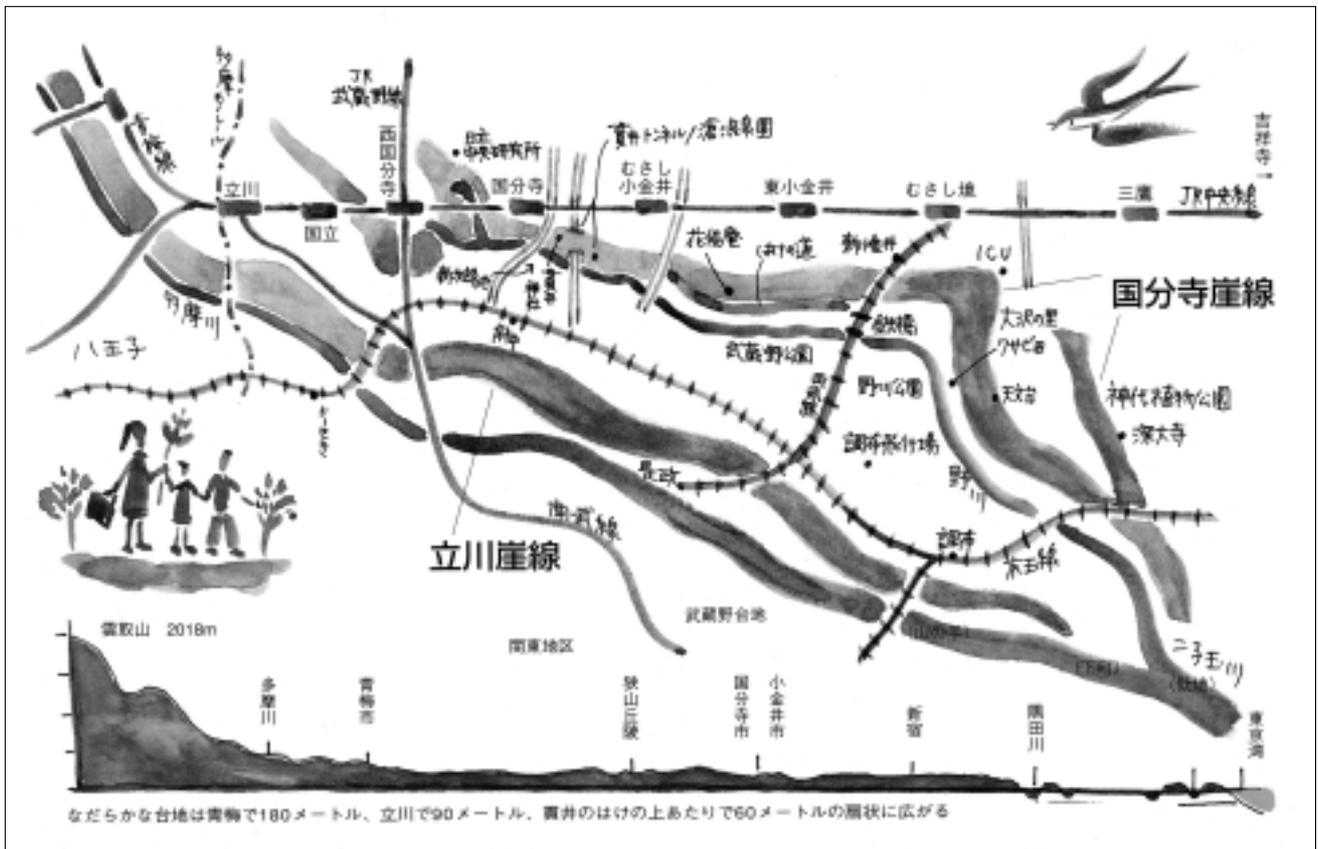
また、形のない水をカメラが追いかけて、光りに揺らぐ瞬間をとらえました。それらが形づくる景観を紹介しながら、水土のゆくえ、そして新たな雨を涵養する方法・雨の設計を提案する試みなども視野に入れて書き進めました。

雨は、そして水は、この上なく貴重な、また扱い方によっては怖い存在です。空から降る雨は地中をめぐる地下水と、樹木や地表が吸い上げ空気を潤す水蒸気と、集まって流れる水たまりや川となって、地図には青い線で引かれます。青い線のひと滴は、土の中から生まれます。

かつて雨は天水、雨乞いも行われていました。コンクリートジャングルの東京では、雨の大半は地表を潤すことなく下水管に集められ直接海へ廃水されています。

武蔵野の春嵐を防いだ雑木林の大樹の落ち葉が積もる大地の下には、遙かな年月を旅する水の物語があります。

(ふゅーじょんぷろだくと刊 / 1200円+税)



国分寺崖線と立川崖線

私と多摩川

世田谷区在住 奥田 章



二子橋下の水練場（昭和11年頃）

ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず、よどみに浮かぶうたかたは…。暗称している方丈記の冒頭です。

その、もとの水の思い出を、多摩川に求めてみようと思います。

いまから五十余年前、半世紀前のことです。往時の私は、名ばかりの夏休みに入ったばかりの戦時下の旧制中学校の三年生でした。渋谷八チ公の銅像前に友人たちと待ち合せ、玉川電車（当時は二輛連結の路面電車）に乗って二子多摩川に水遊びに行きました。なぜかよく分かりませんが、記憶の上で、私たちが下車した駅は本線の終点から分かれた支線が一駅延びた、河岸のワカモトの工場の近くにありました。水はあくまでも透明で、そのまま飲める程、綺麗な水でした。河原の石や砂利は濡れると青く、碧色に、黒に、褐色の赤と多彩で、ハヤ、ウグイ、鮎などの魚影が集まったかと思うと散り、きらりと光り走りました。その場所には渡し舟もあって、溝の口方面からの人を運んでおりました。白い日傘をさして座っている女の人、荷のある自転車を支え立っている行商人、煙草をキセルに吹く老人、子どもも賑やかで、船頭の竿さばきに静かに身を委ねておりました。河

原にはよし簀の小屋がけの茶店が一、二軒、かき氷の広告の旗を風にはためかせ、おでんの煮える匂いなどただよっておりました。私たちは河原に風呂敷を広げ、蘆や灌木の茂みで更衣すると、すぐ泳ぎ始めました。流れがありますので、両手でひとかきしますと、五、六米はすいっと流れます。ここは水練場とでも言うべき淀みで、安全が一応確保されている場所でした。父の若い頃には（明治末）特に、大川（隅田川）などには丸太で区切り、いわゆる川中のプールがあり、そこでは水泳指南の流派ごとに門弟を募る板看板が出ていたと聞きます。例えば、観海流などと。さて、遠くには丹沢山系の山々が夏雲を浮べ、灰白色に霞んでおりました。人出はまずまず、流れの上、下には釣糸をたれる人が蓑蓑帽をかぶり、人形のように立って竿を振っておりました。河には、その河独自の水の匂いとでも言うべきものがあります。旅人が土埃にまみれ、渴をいやし、汗をぬぐわんと本能的に、“河は近いぞ！”と喜びにあふれ急がせる匂があります。多摩川は爽やかな、ほっとさせるような匂いでした。私たちは、何度も河原の焼け石の上を走り、川上から身を流れに委ねました。

仰向けになると、空は青く、広く目に映りました。それは自然の交響楽のような水音や風小鳥の声、場面、場面の名画の如く、心が解放される刹那でした。幸せな青春の一刻でした。

しかし、戦争は、私たちを、そっと置いてはくれませんでした。学校は、一学期から授業はほとんどなく、勤労働員という戦時体制に組み込まれ、疎開工事という、戦火の広がりを部分でくい止める家屋撤去作業や、郵便局、自動車整備工場と、その後一年半、八月十五日まで続きました。

東京は西の方に住んで居りましたので、その後もことあるごとに、何度も訪れました。和泉多摩川、京王多摩川、狛江の川岸と、水泳、釣り、写生、自転車での散歩と多摩川は自然そのものでした。

或る日、夕焼で川面も、蘆も、岸辺のすべてが真赤で、その中に佇んでいた私の残像が忘れられません。

環境雑感

市民とともに環境の保全を考える

小倉 紀雄

水との関わり

私の水との関わりは大学2～3年生の頃（1960年頃）汚れた都内河川の調査の手伝いを行ってからである。卒業研究では、さまざまな河川水、湖水、海水の紫外吸光度を測定し有機物汚染の指標としての有効性を検討した。また多摩川調布堰から取水していた玉川浄水場で半谷先生らが開発していた紫外吸光度の連続測定装置（UV計）の検討も行った。当時の多摩川は合成洗剤の泡や油で汚れ、UV計の測定セルの油汚れの洗浄は非常に困難な問題であった。それから40年、水との付き合いが続いているが、近頃は得られた成果をわかりやすい情報として市民に提供し、ともに環境の保全や修復を広い立場で考えていきたいと思っている。

市民参加の水質調査の始まりと広がり

市民による水質調査が各地で行われているが、そのきっかけは「浅川地区環境を守る婦人の会」（「婦人の会」）の活動であろう。私は「婦人の会」の発足を新聞記事により知り、付き合いが始まった。「婦人の会」のメンバーは簡易測定法により南浅川などの水質調査とアンケートや現地調査を行った結果、自分たちの生活排水が河川を汚している大きな原因であることに気づき、試行錯誤の結果、木炭による手作りの水質浄化を試みた。手作りの簡単な方法であったが、水質の浄化に効果があることが確かめられた。このように市民が環境の実態と原因を明らかにし、水質の改善対策を実践した一連の活動は注目され、多くの地域やグループに広がっていった。市民と専門家が結びつき、市民活動の質を高めたのである。

新しく水質測定を行うグループには、試料の採取から測定法、結果の整理までの詳細なマニュアルを作成し、事前に説明を行った。また、成果がまとまった頃には結果のまとめと評価を行う機会をもった。これは間違ったデータが一人歩きしないようにするためであり、簡易法であっても精度

の高い値が得られるように心がけた。各グループにリーダーが育ち、精度の高いデータが得られる体制ができあがった。

市民による環境学習の成果

府中市民による酸性雨調査のさい、雨のpH測定を継続していたある市民から、従来のpH値に比べ異常に低い値が得られるとの指摘があった。原因についていろいろ調べた結果、使用していたメルク社の試験紙の製造法が変更になり、変更後の試験紙は雨のようなイオン濃度の小さい溶液のpH測定に相当ではないことが分かった。おかしいと気づいた市民は、幸い製造法の変更前後の試験紙でpHを測定していたため、低いpH値を補正することができた。市民がおかしな値に気づき、原因が解明され、対策が講じられたのであった。これは市民による環境学習の大きな成果の一例であり、高く評価できることである。市民による積極的な活動は環境保全や修復のために大きな役割を果たしており、これからも支援したいと思っている。

筆者プロフィール

小倉 紀雄（おぐら のりお）

東京農工大学大学院農学研究科国際環境農学専攻・水環境保全学研究室教授

略 歴

1940年生まれ。東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了、同大学助手、東京農工大学農学部環境保護学科助教授、同大学農学部環境資源科学科教授（現在兼任）を経て、1999年より現職

専 攻 地球化学・環境科学

主な団体職

（財）とうきゆう環境浄化財団選考委員、（財）東京市町村自治調査会・多摩交流基金運営委員会委員、多摩川流域テクノロジーネサンス研究協会理事、みすとみどり研究会代表、A T T流域研究所理事長、河川生態学術研究会多摩川グループ代表、東京都環境審議会委員

主な著書

「水質調査法（共著）」（丸善）、「調べる・身近な水」（講談社）、「きれいな水をとりもどすために」（あすなる書房）、「水質調査ガイドブック（共著）」（丸善）、「調べる・身近な環境（共著）」（講談社）、「多摩丘陵の自然と研究 - フィールドサイエンスへの招待 -」（共著）」（けやき出版）

・第91号から「甦れ！多摩川」に代り、「環境雑感」を連載いたします。当財団の選考委員をお願いしている9名の先生方に日頃、環境についてお考えになっておられることや、感じられておられることについて、交替で執筆して頂くことになりました。

財団からのお知らせ

研究助成報告書完成

助成集報29巻(2000年度)並びに多摩川環境調査助成集第22巻(2000年度)が完成しました。研究の概要は当財団ホームページをご覧ください。報告書は財団へお越し下されば貸し出しいたします。

助成集報29巻

研究課題	代表研究者	所属
武蔵野ローム層における降雨浸透機構および物質移動特性に関する研究	唐 常 源	千葉大学理学部助教授
多摩川流域河川に生育する水草のイオン吸収機構の細胞分子生物学的研究	福 原 敏 行	東京農工大学農学部助教授
多摩川流域における細胞毒性変動の調査、解析	酒 井 康 行	東京大学生産技術研究所講師
多摩川河口・下流域の魚介類内分泌攪乱物質汚染に関する研究	大 槻 晃	東京水産大学教授
多摩川における伏流機構と水質浄化機能評価に関する研究	山 田 啓 一	法政大学工学部教授
多摩川上流域の水源林の保水能力の推定に関する研究	市 川 新	京都大学大学院工学研究科教授
多摩川の流況調査に関する研究－羽村堰越流量と水利用形態の変更を中心にした流況調査－	宮 村 忠	関東学院大学教授
多摩川上流域の沢水組成に及ぼす大気降水の影響	鶴 見 実	弘前大学理学部教授

多摩川環境調査助成集第22巻

研究課題	代表研究者	所属
多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加型の手法、制度についての調査・研究	山 道 省 三	多摩川センター副代表理事
多摩川上支流域の土壌生態学的比較に関する研究	福 田 直	埼玉県立所沢緑ヶ丘高校教頭
多摩川中流域の「府中用水」に関する調査研究	島 村 勇 二	多摩川研究観察会代表
溪間工が河床形態(瀬・淵構造)に及ぼす影響と溪流魚類の生息に関する研究	山 下 晃	放送大学教養部学生
多摩川における環境体験とインターネットを活用したコミュニケーションに関する調査研究	荒 木 稔	たまがわネット事務局長
多摩川における川魚漁のあゆみと遊漁(釣り等)	笹 川 耕 太 郎	東京都立田園調布高校教諭
多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境	比 田 井 民 子	東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員
多摩地域におけるカンアオイ類の分布・生態と保護・育成に関する地生態学的研究	小 泉 武 栄	東京学芸大学教育学部教授
多摩川流域のオオタカの生息状況の実態調査とその保護策に関する調査・研究	尾 崎 洋	東京オオタカ保護連絡会会員

首都圏における多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究、募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 横田二郎）は、昭和50年度より多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に400件の研究に助成金を交付し、340件の研究成果が完成しています。

平成14年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究
多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査、試験研究

3. 応募方法 当財団所定の申請用紙をご請求（返信用切手200円同封）され、学術研究・一般研究いずれかを選択して、ご申請下さい。当財団ホームページからも入手できます。

4. 助成の決定 平成14年3月の当財団選考委員会にて選考のうえ、理事会で決定。

5. 研究の種別

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の性格	環境問題改善のための調査研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査研究で、一般の市民が、特別の学識経験を必要とせず取り組めるもの。
（財団の過去の事例を参照）		
1件当たりの助成金総額の上限額	600万円	300万円
単年度の助成金上限額	300万円	150万円
研究期間	最長2ケ年	最長2ケ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 研究に必要な機器（装置）、器具、備品等。研究機関（大学等）に所属されている場合は、原則対象外。 (2) 消耗品費 調査研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 (3) 旅費 調査研究のための交通費、宿泊費等。 (4) 謝金 調査研究のために臨時に雇った人の謝金等。 (5) その他 機器・備品等の借料、通信費、会議費、その他。	

6. 公募締切日 平成14年1月15日

応募についての詳細は、財団事務局にお問い合わせ下さい。

・発行日 平成13年12月1日
 ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
 〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://www.246.ne.jp/~tokyuenv/>

*印刷所 雄文社 〒336-0001 さいたま市常盤9-11-1 TEL (048)831-8125

